

『クレクス先生のふしぎな学校』

ヤン・ブジェフファ(作) 小椋彩(訳) 福井きとこ(絵) 小学館世界J文学館 2022.11

子供のころ心踊らせた、ヤン・ブジェフファ作『そばかす先生のふしぎな学校』(内田莉莎子訳、ヤン・マルチン・シャンツェル画、1971)が2022年、旧訳からおよそ半世紀ぶりに、小椋彩さんの生き生きとした新訳によって、小学館世界J文学館デジタルブックという形式で蘇りました。

ポーランドで有名なこのお話は、落ちこぼれの主人公アダム・ニェズグトカが大きな失敗をして、両親に連れられてクレクス先生の不思議な学校に入学した半年後から、アダムの日記をもとに記憶をたどる形で始まります。

クレクス先生の授業は不思議で楽しさ一杯。生徒たちは地球儀のようなボールを蹴って止まった場所にある地名を当てるゲームを提案したり、色ガラスで料理を作ったり、不思議で楽しい授業を体験しつつ成長していきます。学校を囲む塀にはたくさんの扉があり、「白雪姫」をはじめいろいろな童話の世界につながっていて、ときどき塀を越えた交流もあって、まるで様々な童話の中心にいるようです。



この物語は最後に不思議な展開で締めくくられます。登場人物も奇抜な発想を深め、最後までめくめく驚きの連続です。

小椋さんの訳は原著により忠実で、全体を通じて多くの工夫が見られます。

例えば、クレクス先生が学校の生徒達全員で「大穴小穴工場」を訪れた時、出迎えてくれた技術者の名前は、旧訳では「バイエン」なのに、新訳では原著通り「コペチ Kopeć」さんです。

さらに一例をあげるとー

「動く歩道はきゆうにスピードをあげて、たちまちぼくらは工場についた」(内田訳)に対して、

「自分の左足を右足にまきつけ、握った両手を頭の上に高く上げると、僕たちみんなの先頭に立って、くるくる回りながら歩きはじめた。そのおかげで、動く歩道はぐんぐんスピードを上げて、僕たちは工場にあつという間にとうちやくした」(小椋訳)

と、より原著に忠実で、情景が目には浮かぶようです。

他にも、クレクス先生が背中の中のポケットの中にあるムクドリに気づかず、椅子にかけようとした時、ムクドリ・マテウシが叫びます。

原文の「Aga, ak!」(←省略のない元の文は「Uwaga, tak (jestem)」)「注意！(私)いるよ」が、

「ますよ、ドリ！」(小椋)／「ドリ、すれなく！」(内田)と訳され、単語の語尾だけを発音するムクドリの言葉

の和訳表現にも、できるだけ原作者の意図を再現しようとする工夫やご苦労が垣間見えます。

著者名も「ブジェフファ Brzechwa」と原文の発音に忠実で、現代の口語表現で統一され読者に親しみやすい丁寧な工夫が随所に見られる新訳によって、クレクス先生の世界が余すことなく伝わってきます。

ウクライナ生まれの著者ブジェフファが本書を書いたのは、第二次世界大戦中の壊滅的な打撃を受けたワルシャワで、このように、子どもたちの希望と想像を掻き立て、温かい眼差しを向けていたことには驚きの念を禁じえません。

同時に、それが2023年現在のロシアによるウクライナ侵攻下の状況と重なることや、物語の最後の悪意に満ちた人造人間による破壊と最近のAIの進化などに対する危険性の指摘などにも不思議な一致を感じ、あの状況下でも子どもたちに夢を与えることを考えた著者の気持ちに思いを馳せました。

小椋さんがあとがきで、落ちこぼれだった生徒たちがクレクス先生の学校で楽しく学ぶことによって生き生きと変わっていく様子に触れ、今日の日本の教育現場にも、それぞれの子供に温かい眼差しを向けたブジェフファの思いが大切、と指摘していることにも深い共感を覚えました。

旧訳の記憶

今回の福井さんの挿絵は優しい絵ですね。

原著の挿絵を描いたポーランドの有名な画家、ヤン・マルチン・シャンツェル Jan Marcin Szancer の描いた世界がこの本の魅力とともに記憶の中にあります。初訳の内田莉莎子さんの叙情ある一種の気品を感じる文体が、シャンツェルの描く夢の世界と相まって優雅な東欧の雰囲気と一緒に子供心に残っています。機会がありましたら、シャンツェルが描くクレクス先生の学校 Akademia Pana Kleksa の世界もご覧になってみてください。

本書は、ブラウザで読むストリーミング形式配信のデジタルブックです。当初は表示サイズによっては内容が先に見えて違和感を覚えたことがありますが、サイズを固定した後は内容に集中することができました。またアクセス機器が三台まで登録できて、ご家族との共有にも便利です。(住谷秀保、茨城大学工学部元教員)